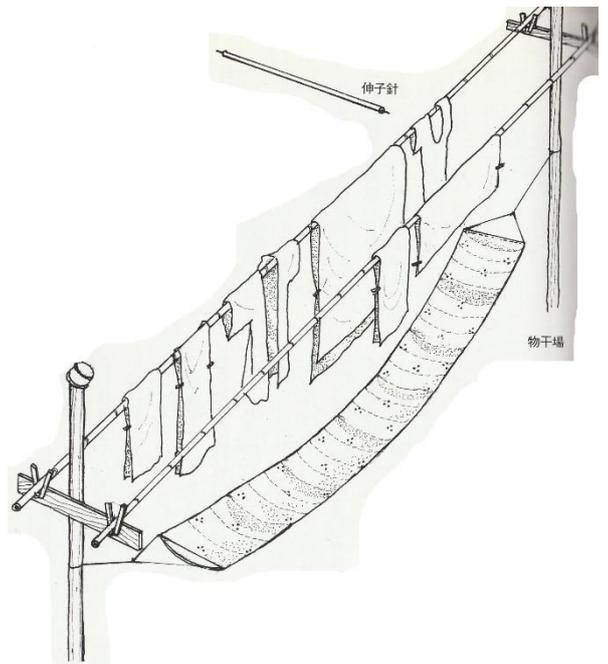


# 張板と火熨斗・鋺



いつの時代も、洗濯してシワのない衣服にする家事は大変なことでした。

和服などは、縫い糸を解いて反物状にして洗い、洗い上がった布に数センチ間隔に両端に針を挿し込んだ細い伸子針で布を張り、両端から強く張って乾かしました。また半端な布切れは『張板』に張り付けて乾かしました。



【イラスト】中林啓治・岩井宏實「昭和を生きた道具たち」河出書房新社 2005

乾いた布は、江戸時代までは、火熨斗や鋺を使って布を伸ばし、改めて糸で縫って着物に仕立てました。

火熨斗とは、金属製の底が平らな浅い円筒形の鍋のような形に柄のついたもので、その皿に炭火を入れてその熱で伸ばしました。

鋺とは、焼鋺とも呼ばれ、小型のアイロンで、先端の部分を火鉢やストーブの上に置いて熱して使いました。